

子供に「生きる力」を——と言う、中教審答申『二十一世紀を
展望した我が国の教育の在り方について』を読んで

——なぜ、今、「生きる力」なのか——

大石 脩 而

A View of The Recommendation of The Central council for Education, Named
"Vision and Policy of School Education to be Estavished foward 21st Century in Japan"

Shuji Oishi

はじめに

中央教育審議会は平成八年七月、子供に「生きる力」と「ゆとり」を、という副題の付いた答申『二十一世紀を展望した我が国に教育の在り方について』を発表した。

戦後五十年、気が付いてみると、心身ともにひ弱な子供たちが育ちつつあり、このままでは激動の二十一世紀を生き抜けそうもない。子供たちの「生きる力」を回復するために、学校・家庭・社会の持つ教育力を総動員する必要がある、というのが答申の趣旨である。

この答申は、ジャーナリズムも大きく取り上げなかったし、その後教育界でもあまり議論にならなかった。また、その三ヶ月後に行われた総選挙でも、行政改革や消費税問題ばかりがクローズアップされ、こうした教育問題を正面から問いかけた政党も候補者もない

かった。学校教育が今、戦後最も憂慮すべき状況に差し掛かっている、という危機感が社会全体に薄いからであろう。

「学校嫌い」「落ちこぼれ」「いじめ」などが増加蔓延し始めたのは、昭和五十年代からである。それから二十年近く経った今も、その趨勢に歯止めが掛からない。ほんのちよつとしたことで挫折してしまふ自律心の弱い子供や、弱いものばかりをいじめる正義感や勇気のない子供が増え続け、さらに最近では、子供の体力までが低下し始めた。子供たちはストレスで疲れており、心身のひ弱な日本人が育ちつつある、というのである。こんなひ弱な日本人が出現したのは、おそらく日本の歴史上初めてだろう。

学校教育の力も落ちていく。たった一人の生徒の「自殺予告」で、学期末試験や運動会を中止せざるを得ない学校までが出始めた。このままでは学校教育そのものが成り立たなくなる恐れさえある。

明治以来、我が国だけがアジアで近代化を成し遂げ、戦後は廢墟の中から経済大国を実現することができたのは、勤勉で知的能力の高い国民を育成した初等教育に依るところが大きかった。その「世界に冠たる」と言われた学校教育の伝統と蓄積を受け継ぎ、少なくとも初等教育だけは戦後も安定した教育システムとして時代にふさわしい子供たちを育成してきた、と思われてきた。その初等教育が変質し始めているのである。

しかも、折りあたかも二十一世紀を前にして、世界経済や国際関係の潮流と構造が大きく、急激に変化しようとしている。我が国の政治経済も否応なしに構造的な大転換を迫られている。こうした世界的な大転換期を日本人が生き抜くのは容易なことではないだろう。

確かに政治経済システムの転換も重大事には違いないが、それにもまして今求められているのは、困難な時代を生き抜く「気概」と「たくましさ」を持った国民の育成であろう。

このように子供たちがひ弱になり始め、学校教育が無力になってきたという「現実」が一方にあり、また一方では、子供たちを気概のあるたくましい人間に育てる教育が「期待」されている。しかも、その「現実」と「期待」の乖離が、このままではますます大きくなっていきそうである。

「国家百年の計は教育にあり」とよく言うが、明治の「学制発足」が国の近代化を担う人材を育成し、戦後の「六三制改革」に伴う義務教育の延長が、社会の民主化と経済発展を支える原動力になったことを思えば、戦後五十年を経た今日、二十一世紀を日本人が生き抜くための、国を挙げての教育改革が必要であろう。中教審の言わんとすることもよく解る。

その中で、学校教育が受け持つ役割と力には自ずから限度があるうが、この小論では、果たして学校が中教審の言う「生きる力」を、どこまで子供に教えることができるか、について考えてみたい。

一、ひ弱な日本人が育っている

子供たちが如何にひ弱になってしまったか、という現状とその社会的背景について、答申は、文部省や各種団体の調査に現れた三十枚近い図表を使って詳しく説明している。

その主なものを拾うと

- ① 「家族との対話」は小・中・高校生とも一日わずか五〜七分しかない(家庭の教育力の低下)
- ② 休みの土曜日の午前、「ゆっくり休養したい」という疲れの目立つ生徒が、小学五年生21%、中学二年生29%、高校二年生37%にのぼる
- ③ 「千メートル以上の山に歩いて登ったことがある」「日の出や日の入りを見たことがある」「チョウやトンボを捕まえたことがある」といった十数項目の自然体験が、この十年間に軒並み減っている
- ④ 「切れた電球を取り替えたことがある」「鎌や鉋で物を切ったことがある」「外で火を燃やしたことがある」といった生活経験も、この十年間に軒並み減っている
- ⑤ 「夜、眠れない」という生徒が、小学校四〜六年生に34%、中学生35%、高校生30%もいる。また「疲れやすい」は、小学

生28%、中学生46%、高校生48%にのぼる。同様に「朝、食欲がない」が、小学生27%、中学生41%、高校生40%にもなる(子供にストレスが溜まっている)

⑥ 「朝、一人で起きる」「自分の身の回りや部屋のかたづけをする」「勉強しろと言われなくても自分で計画を立ててやる」といった自律心のある小・中学生がこの十年間に目立って減っている

⑦ 小学生の肥満化が進み、裸眼視力が落ちてきている

⑧ 小・中・高校生とも体力、運動能力が低下している

⑨ 「学校生活に満足しているもの」は、「まあ満足」も含めて小学生91%、中学生71%、高校生64%で、中学、高校にいくに従って「満足していない」が増えて、高校生は三人に一人が満足していない

⑩ 小・中学生の塾通いが、この二十年間に目立って増加し、小学生は12%から24%に、中学生は38%から60%になっている(「ゆとり」のない子供たち)

⑪ 「いじめ」は、昭和六十年代に横這い傾向にあったのが、ここ数年増加に転じ始め、内容も陰湿になっている

⑫ 「登校拒否」の小・中学生も増加傾向にあり、平成六年度で小学生約一万五千八百人、中学生六万一千七百人にのぼる

この他にも、高校生の「薬物依存」が増えているとか、この種のデータを探せば切りがあるまい。

こうした心身のひ弱さの当然の結果として、子供たちから「勇気」「正義感」「勤勉」「努力」「責任感」「奉仕」などといった健全な社会

を支える社会規範意識が弱くなっている。

勿論その原因は「学校教育」だけにあるのではない。「家庭」や「地域社会」の教育力の低下やマスコミの責任もある。むしろ、その方が大きいかもしれないが、ともかく子供たちはストレスで疲れており、それが「学校嫌い」や「いじめ」になって現れる。それも、ごく一部の生徒だけの問題ではなく、学校教育全体が揺さぶられ始めた。事態はこれ以上もう放っておくわけにはいかない段階に差し掛かっている、というのが学校教育の実態であろう。

一人の生徒の「自殺予告」が、学校全体の学期末試験や運動会を中止させた事件について、新聞はこんな風に書いています。

「自殺予告の手紙や電話で、学校を脅かす事件が山梨、新潟、神奈川、福島の中や高校で起きている。いじめによる自殺が相次いだこともあり、学校の対応は極めて慎重だが、多くは(体育祭や学期末試験の)中止を余儀なくされている。命に関わることで無理もないが、それにしても、生徒に何を教えたのか、と聞きたくなる。……こんな先生の投書があった。「ふざけんよ。 teme、ぶつ殺すぞ」こんな言葉を何回あびせられたことか。二十年間耐えた後、相手が傷つくことを教えなければ生徒が気づかないと、この先生は最近ようやく言い返すことにしたという。先生が、教えることを忘れているのだ」(要約、平成八年十月十八日付、傍線筆者)

こういう考え方が、社会の健全な常識であろう。

「(学校は)生徒に何をおしえてきたのか」「先生が、教えることを忘れて」と言われても仕方ないところが、残念ながら今の学校にはある。学校は、入学試験や学期末テストに必要な知識ばかり教えるところはないはずだ、と学校の存在意義が問われているのであ

る。

この答申でも第二部第一章「これからの学校の在り方」で

「これからの学校は、『生きる力』の育成を基本とし、知識を一方的に教え込むことになりがちだった教育から、子供たちが自分で学び、自ら考える教育への転換を目指す」

と言うが、このままの学校から二十一世紀をたくましく生きる日本人が育つとは思えない。それどころか、ひ弱で社会規範意識の曖昧な日本人が、やがて世界から相手にされなくなりそうである。

それにも拘わらず、学校や家庭に危機感が薄いのは、二十一世紀という未知の時代を日本人が少々甘く見過ぎているからであろう。

一、二十一世紀は厳しい時代である

二十一世紀が日本人にとって厳しい時代であることは、いくつかの日本の置かれた基本的状況を、具体的に考えてみれば容易に解ることである。

その大前提は、資源らしい資源のない狭い国土に住む一億二千万人の国民が、いつまでも平和で豊かな生活を維持し続けることができるかどうか、ということであろう。端的に言えば、食っていけるかどうか、である。

(1) 日本の経済構造が様変わりする

二十一世紀後半、日本は目覚ましい経済発展をとげ、国民の生活は豊かになった。経済大国として国際的地位も向上安定した。勤勉で知的能力の高い国民が一生懸命働いたからである。それが二十一

世紀を前にして様子が変わり始めた。日本に繁栄と安定をもたらした経済構造が世界に通用しなくなってきた。

資源のない小国で一億人を越す国民が食っていくためには、優れた商品を安く世界に供給する技術とノウハウを持ち、必要な原料を輸入加工して輸出する貿易国家として生きる以外に方法はなかった。この図式がおかしくなり始めたのは、長く続いた経済成長の中で、いつの間にか日本が世界一の「高物価」「高賃金」国になってしまったからである。為替レートも物価水準に比べて「円高」である。

こうなれば当然、日本製品の国際競争力は落ちる。日本国内で百円でできる商品を、賃金の安い東南アジアで作れば四、五十円でできるだろう。一方では、コンピューターが進歩して、日本人が世界に誇った熟練技術を必ずしも必要としない製造工程が可能になってきた。世界経済はボーダレスの大競争時代に突入し、日本経済はその大波に洗われている。

バブル経済が崩壊した後の日本経済は、これまでの甘い考え方を精算し、構造的な大転換を迫られた。ほとんどのメーカーが、こぞつて生産拠点を賃金の安い海外に移し始め、いわゆる「産業の空洞化」が進行中である。それに伴って、雇用構造も変わらざるを得ない。工場が海外に出ていけば、仕事を失う人も増えるだろう。その分、新しい情報産業やニュービジネスが新しい雇用を生み出すことができるかどうか。それができなければ、日本もヨーロッパなみの高失業率の国になってしまう。

いずれにせよ生産拠点が海外に移るにつれて日本経済の海外依存度は高まる一方だろう。二十一世紀の日本人には、世界の中で、世界と共に生きるしか道はないのである。

(2) 食糧問題も前途多難である。

日本は食糧を自給できない数少ない国の一つである。その自給率はカロリーベースで50%前後しかなく、ほとんどの食糧を輸入に頼っている。それも将来にわたって安定供給される保障はない。

ちなみに世界の人口は今世紀はじめ十数億人に過ぎなかった。それが今や六十億人に迫ろうとしており、二十一世紀初頭には百億人に増大すると予測されている。今でさえ世界人口の70%を占めるアジア、アフリカでは、十億人近い飢餓すれすれの最貧層が問題になっているところへ、世界の人口が二倍近くなるというのである。隣国中国は人口約十三億人の大国だが、やがて十五億人になり、十年後には食糧不足から三億人近い餓死者が出るだろうと最近の新聞が報じている。

そんな世界の中で、日本人だけが今までのような飽食を続けていけるかどうか。よく言われることだが、穀物の段階で食べれば十分ある穀物を、牛や豚に食わせて肉にすると一人か二人しか食べられない、という。もし地球上のすべての人間が、日本や欧米先進国のような、肉を当たり前のように食生活をする다면仮定すれば、十数億人しか食べていけない、とも言われる。

それにも拘わらず、これまでのように金さえ払えば、どの国も喜んで日本に食糧を売ってくれる、と考えるのは甘すぎるのではあるまいか。「アンフェアな日本人」という名のパッシングによって、日本商品がアメリカから閉め出されそうになったのは、つい昨日のことである。

(3) 地球環境問題が世界を変える。

地球環境問題には、地球の温暖化、オゾン層の破壊、砂漠化、熱帯雨林の減少、酸性雨問題など様々な問題があるが、そのうち「地球の温暖化」一つとっても、二十一世紀が容易な時代でないことが解るはずである。

地球温暖化の元凶である大気中の二酸化炭素加がこのまま増加し続けられれば、その保温効果によって、二十一世紀初めには大海の温度が上昇し、北極や南極の水が融けだして、海面が一メートル近く高くなるという。アジアの穀倉地帯であるメコンデルタなどは海中に沈んでしまうかもしれない。さらには地球の生態系全体を大きく変えるような気象変化によって、これまでの緑地地帯が砂漠化したり、乾燥地帯が多雨地帯に変わったたりするかもしれない。この地球に一体何が起ころのか、その全貌を想像することは不可能だろう。

早い話が、地球の食糧生産力一つとっても問題は深刻である。地球の温暖化によって、これまでの穀倉地帯が不毛の地になる一方で、砂漠地帯での食糧生産が可能になるかもしれない。そうならばそのプラス、マイナスで食糧の総生産量は落ちないだろう、と考えるのは早計のようである。食糧の生産は、その土地が長い間かかって培ってきた農業技術に依存しており、新しい農耕可能な土地が出て現したからといって直ちに効率のいい生産が始まるわけではない。それに新しい農地を整備するには多額の投資を必要とする。

こうした地球の温暖化による世界の食糧生産力の低下が、二十一世紀の日本にどんな混乱をもたらすかについては既に述べた。

(4) 日本は多国籍国家になる？

二十一世紀に世界の政治や経済に何が起きるのかを展望することは不可能だが、少なくとも現在の姿がそのまま続くと考えるのはナンセンスである。

今世紀を振り返っても、共産主義国家・ソビエト連邦の誕生と崩壊、二度にわたる世界大戦、アジア・アフリカ諸国の独立、共産主義中国の誕生、米ソの冷戦、最近ではアジア、ヨーロッパ各地で続発する地域戦争などの、世界の歴史を塗り替える大事件が相次いで起こった。二十一世紀には、現在の世界が十九世紀末の世界と比べて大きく変わったのよりも、もつとも大きな変化が待ち構えているだろう。

たとえば、中国である。やがて人口が十五億人になろうとする中国が、近い将来深刻な食糧難に見舞われそうなことは既に述べたが、その中国は、他民族を抱え込んだ中央集権国家である。人類史上、これだけ大きい領土と国民を中央集権で統治した国家は存在しなかった。ソビエトは連邦共和国だったし、アメリカは合衆国である。

それだけに政治が難しい。経済発展の著しい沿岸部と内陸部の貧富の差が広がっている。民族の自治と独立を求める世界各地の紛争が、中国にも波及するかもしれない。毛沢東、登昇平と続いた強固な支配体制が崩れた後の中国は、いつまでも中央集権国家であり得るのか。その登昇平は九十歳を越す高齢で、いつまでも元氣ではない。

ソビエト連邦が崩壊したのは一九八七年だった。その年の八月、クリミア半島の別荘地で休養していたゴルバチョフは、政変を知っ

て急遽クレムリンに戻る。それがなんと四ヶ月後の十二月にはもう、七十年続いた世界の共産主義大国ソビエト連邦は解体してしまっている。そんなソビエトの運命を誰が予測できただろうか。

もし中国の中央集権のタガが緩めば、十五億人近い人口のかなりを占める最貧層の一部が、新天地を海外に求めて移動し始めるかもしれない。今でも東南アジアや中国から小舟に乗ったボート・ピールが、豊かな国と思われる日本やアメリカに押し掛けて来ている。初めのうちは、これまでのように水際作戦で追い返すこともできるだろうが、押し寄せる人数がどんどん増えてくれば、打つ手がなくなるだろう。観光ビザで入国し、そのまま住み着いてしまう移住者も増えるに違いない。そんな中国からの移民が五千万人や一億人、日本に来てもおかしくないというのである。

もしそんなことになれば、一億二千万人の日本人が住む日本は、よき時代の日本ではなくなってしまうかもしれない。そういう、これまで想像したこともなかった事態が、何時起こってもおかしくないのが二十一世紀である。

こうした厳しい二十一世紀に、資源のない日本が狭い国土の中で、自分たちだけが仲良く豊かな生活を楽しもうとしても無理である。生き残る道は「世界の中で生きる日本」に生まれ変わるしかないはずである。誠実で、勤勉で、高い能力を持ち、世界中から期待され、信用され、尊敬される日本人になることができ初めて、二十一世紀を生き抜くことができるだろう。

ところが、その日本の子供たちから気概やたくましさが無くなり、「生きる力」が弱まってきた。誠実で、勤勉で、高い能力を持つと

はとても言えない子供たちが育ちつつある。果たして二十一世紀の日本は大丈夫なのか、と心配になる。

無論、学校教育だけに問題があるわけではないが、とりわけ学校教育には頑張ってもらはなければならないだろう。そのためには、これまでの学校教育の考え方を根本から再検討する必要がある。一例を上げれば、二十一世紀の日本人に期待される誠実さや勤勉さを、学校ではどう教えるのか。小学校を卒業する時、戦前の学校では六年間無欠席の子供に皆勤賞を与え、その誠実で勤勉な努力を誉めた。戦後はそれを止めてしまった学校が多い。特定の個人を表彰し、激励することが、戦後の民主主義教育に反するとでもいうのだろうか。そんな戦後の学校教育の持ついくつかの問題点を次に考えてみたい。

三、「生きる力」を評価できない戦後の学校教育

もともと学校の社会的役割と責任は、ベスタロッチの時代から「子供に一人前の大人として生きていける知識や技術、それに態度や習慣を教える」ことだった。言い換えれば「生きる力をつける」ために学校があった。

それをこの答申は、今更のように子供に「生きる力」と言う。考えてみればおかしなことだが、それだけ学校教育が無力になっていくからであろう。中教審の言う「学校の在り方」や「生きる力」とは、およそ次のようなものである。

【学校の在り方】

(いじめや登校拒否の問題で学校の存在が問われているが)学

校は、子供一人一人を大切にし、子供たちが自分のよさを見だし、それを伸ばし、存在感や自己実現の喜びを実感できる学校であることが重要である。

【これからの学校教育】

- ① 「生きる力」の育成を基本とし、知識を一方的に教え込むことになりがちだった教育から、子供たちが自ら学び、自ら考える教育への転換を目指す。そして知・徳・体のバランスのとれた教育を展開し、豊かな人間性とたくましい体をはぐくんでいく。
- ② 人間性、正義感、公正さ、自然への愛情、他人との強調、人権の尊重、思いやりなどの教育は、どんな時代でも大切である。

【育成すべき資質・能力】

- ① 国語の表現力、理解力
- ② 日本文化の理解と愛情(外国文化の理解と尊重)
- ③ 論理的、科学的思考力(情報活用能力)
- ④ 家庭人、社会人としての実践的能力と態度
- ⑤ 芸術を愛好する感性と運動に親しむ習慣と態度
- ⑥ 思いやり、生命や人権の尊重、感動する心、公德心、ボラ
ンティア精神、郷土愛、愛国心、国際親善の心

言い換えれば、こうしたことが学校教育でなおざりにされている、ということでもある。問題は、それをこれからどうやって教えるか、である。へたをすれば、この中教審答申もただの作文に終わっ

てしまふかもしれない。

もつとも、戦後日本の学校教育は、世界に誇る立派な教育目的を既に持っている。学校教育法(第一条、教育の目的)には、こう書かれている。

「教育は、人格の完成を目指し、平和的な国家及び社会の形成者として①真理と正義を愛し②個人の価値をたつとび③勤労と責任を重んじ④自主的精神に充ちた⑤心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」(○数字、筆者)

この五つの価値が、戦後日本人に「生きる力」を与える具体的内容であつたはずである。その通りの日本人が育つていたのであれば、今更中教審が「子供に生きる力」などという当然のことを強調する必要はなかつただろう。そこで、なぜそうならなかつたのか、という反省をここでしておかないと、また同じことになりかねない。

結論から先に言うと、戦後学校教育の目的ははっきりしているし、教科書も立派になつたが、肝心な子供の「評価」に問題があつたのではないか、と思われる。

どんな教育にも「教育目的」があり、その目的を実現するための「教育内容」や「教育方法」が用意され、教育が進行する過程で、果たして所期の目的通りの成果が上がつたかどうかの「評価」が行われる。所期の目的が達成されていないとすれば、途中の教育内容や教育方法、評価のし方のいずれかに問題があつたと考えるのが普通である。

学校教育の評価の代表的なものに学期末、学年末の「通知表」がある。「入学試験」の成績なども広い意味で学校教育の評価だといえるだろう。その通知表や入学試験で、学校教育法の目的がどれだ

け評価されてきたのだろうか。「真理と正義を愛し」「勤労と責任を重んじ」「個人の価値をたつとび」「自主精神に充ちた」「健康な」子供の育成という学校教育の目的に照らして、まともに評価されてきたのもしかしたら「健康」ぐらいなものかもしれない。

算数ができても、必ずしも「真理を愛する」とは言えない。反対に算数が出来なくても「真理を愛する」子供はいる。テストができても、責任感の弱い子がいるし、その反対もある。学校教育の目的に照らした評価をすまじだ、と言われても、先生たちは困るだろう。

しかし、だから評価をしなくてもいい、ということにはならない。「落ちこぼれ」も「学校嫌い」も、子供心に自分が学校でまともに評価されていない、と思うからではないのか。中教審は、学力でしか人間を評価しようとする学校教育の原因は「過度の受験戦争」にあるというが、テスト一本やりの今の高校や大学の選抜方法の中に、学校教育法という人間的な価値を加味することが、本当にできないのか。

この話を煎じ詰めていくと、「日本は学歴社会だから」ということになるらしいが、その学歴社会は既にかなり崩れはじめている。どんな大企業の入社試験でも、企業が必要とする基礎的な知的能力(学力)がありさえすれば、あとは人物本位に変わっている。重視するのは面接で、問題になるのは「頑張りがききそうか」「責任感や協調性はあるのか」「どんな個性をもっているか」といった人間性である。テストが出来る人間だけでは、企業は生き残れない。中教審流に言えば、産業界は既に「生きる力」の時代に入っている。

いずれにせよ、学校が人間性を評価しなかつた、もっと正確に言えば、できなかつたところに、戦後学校教育の最大の欠陥があつた

のではないかとと思われる。評価のできない「勤勉さ」や「正義感」「勇氣」などを先生たちに教える、といっても無理な注文である。学校教育がどんなに立派な目的を掲げても、それに伴う評価がきちんと行わなければ「絵に描いた餅」になってしまう。中教審が今、「生きる力」などと言い出しているのは、学校教育法の目的を子供の評価に生かし切れなかった戦後教育のツケが回ってきていることを意味している。

今度の「生きる力」という答申も、「何を」「どう教え」、その結果を「どう評価するのか」という教育の基本をすっかり押さえてかからないと、また同じ道をたどることになるかもしれない。

四、中教審への疑問

——これで本当に「生きる力」がつくのか——

この中教審答申に限らず、臨時教育審議会以後の文部省関係の文書には「自ら学ぶ意欲」「社会の変化に主体的に対応する能力」「個性を活かす教育」「豊かな人間性」「たくましく生きる」「子供の経験や興味・関心を活かす」といった言葉が必ず出てくる。

昭和五十年代になって「落ちこぼれ」や「学校嫌い」「いじめ」「校内暴力」「少年非行」など教育現場の荒廃が社会問題になり、文部省だけに任せて置くわけにはいかないという理由で内閣に設置されたのが臨教審である。その臨教審は、教育が荒廃するのは学校教育が画一的、硬直的だからだと考え、学校教育の自由化、個性化政策を強く打ち出した。それが最近の文部行政に反映されているわけである。

学校は「先生が生徒を教えるところではなく、生徒が自ら学ぶところ」に変わってきた。先生が「ムチを振りチイパッパ、もう一度みんなでチイパッパ」と奮闘するスズメの学校ではなくて、「誰が生徒か先生か、みんな泳いで来てごらん」というメダカの学校の方が本場の学校だというのが、最近の学校観である。

「子供に生きる力」と言う、この中教審答申も「これからの学校教育は『生きる力』の育成を基本とし、知識を一方的に教え込むことになりがちだった教育（学校）から、子供が自ら学び、自ら考える教育（学校）への転換を目指す」としている。文部省がそう言えば、深く考えもしないで、すぐ草木もなびいてしまうのが日本の教育界である。皮肉な言い方をすれば、教育の自由化、個性化という名の画一化が進み出した。

こうした風潮に水を差すようだが、「子供が自ら学び、自ら考える」のはいいとして、その中から本当に「生きる力」が出てくるのか。子供は、いくらしっかりしていても子供である。自発性とか興味・関心や経験とかいっても、自ら限度がある。もっと別な言い方をすれば、子供が仮にイヤだと言っても、教えるべきことはきちんと教えなければならぬのではないか。

一例を上げると、弱々しい子供に「生きる力」をつけるには、身心を鍛えなければならぬ」というのが常識だろう。戦後の経済成長を支えた戦前・戦中の世代の多くは、恵まれない環境の中でずいぶん苦労した。言い換えれば、鍛えられて育った。それが戦後の荒廃から立ち上がる力に繋がっていった。

ちようどこれを書いていた朝の新聞小説に、こんな話が載っていた。登場人物は、豊臣時代に日本と呂宋（ルソン、現フィリピン）

を股に掛けて活躍した伝説的な豪商・納屋助左衛門の子供時代の十郎太と、彼を育てる爺やの南無右衛門である。

「だが、この優しさと心弱さが、やがて・・・」

と、南無右衛門は思う。

「若をシナイにしてしまう」

シナイとは、実の入っていないモミのことである。

この荒々とした乱世、稲穂から落ちこぼれたシナイが生きていけよう筈がなかった。

「若よ、強うなれ、強うなれ」

強さや勇氣などというものは、天性のものではない。我が身を練り心を鍛えて、みずから奮いたたせ、鼓舞することによってのみ掴み取るものではないか。

「涙なんどこぼしては、つよいおとこにはなれぬ」

「それなら十郎太はもう泣かぬ」

十郎太は、自分の背丈ほどもある握り太の赤檜の木太刀をつかんだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

南無右衛門が、ひ弱な十郎太に教えたのは膂力をつけさせるための素振りであった。

おさない十郎太は、汗みずくになりながら千回振るようになるまで三ヶ月かかった。

「生きる力」をつける教育には、こういう「大人が子供を鍛える」という側面が必ずあるはずである。「勤勉さ」を教える。「勇氣」を

教える。そういう精神の本当の意味を、年端もいらない子供たちが知っているわけではない。大人が長い人生の中でやつと理解でき、身につけた大切なものを、何も知らない子供たちに教え込んでいく。それを、子供に「自ら学べ」と言っても無理である。ところが、この答申のどこを読んでも「子供を鍛える必要がある」とは書いてない。それでいいのだろうか。

もう一つの疑問は、「自発性」「個性」を尊重する教育の難しさに関することである。

人間一人一人はそれぞれの願い、個性、素質能力を持っているのだから、自発性を尊重し、取り柄を伸ばしてやるのが、一人一人の幸福に繋がっていくはずだ、というのが自発性、個性尊重の教育であろう。そのために小中学校では、子供の興味や関心を活かした教育が行われ、高校では多様化が進んで、選択できるメニューがいろいろ用意されるようになった。たとえば言うなら、ソバもある、カレーライスやトンカツや寿司も用意した、さあ好きなものを食べてくれ、というのに似ている。

ところが、である。子供たちの、肝心な食欲がなくなってきた。個性や素質能力を伸ばそうというメニューに食いついてこない。司馬遼太郎に言わせれば「電圧が下がってしまった」というのが実情ではないだろうか。自発性、個性を手がかりにして、自己実現の道を開いてやるうとしても、生徒が乗ってこない。これでは自発性、個性尊重の教育が成り立たない。

教育で一番難しいのは、やる気を起こさせることだという、やる気が出ればしめたもので、あとは自分で必要なことを覚えていく。日本がまだ貧しい時代は、そのやる気を起こさせることが、比較的

容易だった。子供たちに「貧しさから脱出したい」「なんとか一人前に食っていききたい」という気持ちが強かったからである。

それが、豊かな時代になると、やる気を起こす動機が希薄になる。少々おだてても、その気にならない。落語にこんな話がある。

おやじ「そんなゴロゴロ寝てばかりいないで、働いたらどうだ」

息子「なんで働かなければいけないのか」

おやじ「働けばお金が儲かって、寝て暮らせる」

息子「オレは、もう寝ているよ」

子供や青年の、人生に立ち向かう意欲が弱まってきたのは日本人だけではない。これは一種の先進国病である。人類の歴史の中で、こんな気力のない子供や青年が現れた経験がないから、どの先進国も持て余している。そんな子供たちを相手にして、中教審は「自発性を尊重し、個性を伸ばす」「自己実現の喜びを感じさせる」教育が大事である、と言うだけである。

なぜもつとはつきり「子供には教えないならならぬことがある。それが、教師の仕事だ」と現場の教師に呼びかけないのか。

「学校は、先生が生徒を教えるところではなく、生徒が自ら学ぶところである」というような、最近の教育界の風潮の中から、中教審の言うような「生きる力」が、果たして育つかどうか疑問を抱くのは、私だけではない。

おわりに

既に述べたように二十一世紀は、ひ弱な日本人同士が資源の乏しい小さな島国で肩を寄せ合い、メンバー制の仲良しクラブのように生きていける時代ではない。政治も経済も文化も、世界の中に組み込まれ、「世界と共に生きる」以外に日本人の生き方はないはずである。

そのためには、世界から期待され、信頼され、尊敬され、しかも、世界に貢献できる日本人になる必要がある。勤勉で、賢く、正義感と勇気を持ち、人の嫌がることを引き受け、困っている人がいれば手を貸し、・・・あたかも宮沢賢治と野口英世と二宮尊徳を足したような人間像が求められている。

そんなに難しく考えなくても、身近な例を上げれば、こんな日本人ではないかと思う。

『エジプト・カイロ校外のビル倒壊現場故で活躍している日本の救援隊に対し、現地のマスコミや救援隊関係者から評価の声が上がっている。日本から持ち込んだハイテク搜索機器もさることながら、エジプト人とともにほこりまみれ徹夜で粘り強く「手作業」を続ける姿が好感を呼んでいるようだ。

ビル倒壊による死者は、この日までに約五十人に達し、日本隊は七人の遺体を発見したが、エジプト国営放送が「アジアから遠路はるばる救援協力にきた」と称賛。有力紙アハラムは「夜中に多くのコンピューター機器を動員し、埋もれた人の搜索に当たる」様子などを社会面トップで詳細に報じた。救援作業の総指揮官であるナ

ルデル・消防署長は「日本チームは長い時間、懸命に瓦礫をどけるなど、自分たちの手を使い働いた点でもよく貢献している」と述べた』（平成八年十一月二日、日経、要約）

こういう日本人が、世界各地で活躍し、評価されるようになって初めて、日本という国の二十一世紀の展望が開けてくるのではないか。

ところが実態は、弱い者をいじめ、いじめられている友達を見て見ぬ振りをし、ちよつと気に入らないと学校へ行くのが嫌になり、親や先生に暴力を振るうような子供が増えている。昔流に言えば、性根が腐りかけている。そういう子供たちをどう鍛え直すか、が差し迫った教育改革の課題なのである。

おそらく学校現場の先生たちの多くは、「自発性を尊重し、個性を伸ばすことによつて、子供に生きる力を付ける」という、あまりにも抽象的な中教審答申に戸惑っていることであろう。

最後に、この教育改革は、「お手本」がないという点で、これまでの教育改革とは違った難しさがある。「明治の学制」が先進国であったフランスやドイツの制度を取り入れ、「戦後の六三制」がアメリカを手本にしたのと比べて、今後は海図のない航海に乗り出すようなものである。

しかし、これはなにも教育問題に限った話ではない。日本の政治や経済は、教育より一歩早く戦後五十年の総決算を迫られ、前例のない時代に突入している。戦後学校教育は、確かに制度や施設のよいうなハードウェアは充実したが、そこでどういう人間を育てるのか、

というソフトウェアについての総決算を、今迫られているといえよう。